慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	生誕一五〇年記念福沢諭吉展の前後
Sub Title	A brief sketch of a study group on Fukuzawa and his students
Author	小野, 修三(Ono, Shuzo)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2013
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.30, (2013.) ,p.67- 89
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：慶應義塾福沢研究センター開設三十年#論説
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20130000-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代日本研究第三十巻（二〇一三年）
特集　慶應義塾福沢研究センター開設三十年

論説

生誕一五〇年記念福沢諭吉展の前後

小野修三

一、はじめに

一九八四年八月一日発行の『塾』に掲載された「座談会　福沢諭吉展の開催をめぐって」の冒頭で、福沢研究センター所長の石坂巌商学部教授は「福沢研究センターが昨年四月から発足して、七月に展覧会の話が決まったわけです。もちろんセンターだけでやるのではありませんが、福沢研究センターとして最初の大仕事になりました」[1]と述べている。本稿はその「福沢研究センターとして最初の大仕事」であった生誕一五〇年記念福沢諭吉展（東京展一九八四年一〇月九日～二一日、大阪展一九八四年一二月二九日～一九八五年一月一三日、横浜展一九八五年四月二日～七日）[2]の開催に至るまでを、狭くセンター発足年の一九八三年七月から一九八四年一〇月までの一年数ヵ月の準備期間に限るのではなく、広く一九七九年に始まる慶應義塾学事振興資金による

研究補助を受けた三年継続の第一次、第二次の共同研究の、年数にして計六年に亘る事柄として、その経過を当時の限られた資料をもとに辿ることを目的としている。なお、石坂所長が福沢研究センターと「福沢諭吉展の開催」とが同一ではないと述べているのと同様に、本稿が紹介する第一次、第二次の共同研究と「福沢諭吉展の開催」とは、その人的、物的要素において重なる所が大であるとしても、決して同一ではないことは予め指摘しておきたい。

第一次の共同研究とは一九七九年度（昭和五四年度）から一九八一年度（昭和五六年度）までの三ヵ年に亘る「明治期における福沢および福沢門下生の活躍に関する資料蒐集・整理・基礎的研究（一）」（研究代表者島崎隆夫経済学部教授）、「同（二）」（研究代表者石坂巌商学部教授）、「同（三）」（研究代表者石坂巌商学部教授）であり、そして第二次の共同研究とは一九八二年度（昭和五七年度）から一九八四年度（昭和五九年度）までの三ヵ年に亘る「日本の近代化と福沢および福沢門下生の活動に関する基礎研究（一）（二）（三）」（研究代表者高鳥正夫法学部教授）である。正確には前者の第一次共同研究は慶應義塾学事振興資金による研究補助であり、後者の第二次共同研究は福沢諭吉記念慶應義塾学事振興資金による研究補助であった。(3) 本稿ではこうした研究補助によって可能となった研究作業のなかの知的誠実さも確認したいと考えている。知的誠実さを生命とする思想的営為が当時見られたと記憶するが故である。

二、生誕一五〇年記念福沢諭吉展

時間的な順序としてはまず一九七九年からの共同研究の内容について言及しなければならないが、ここでは

東京日本橋三越展（1984年10月）

逆に、一九八四年一〇月に東京都中央区の日本橋三越本店を皮切りに開催された生誕一五〇年記念福沢諭吉展の概要をまず説明しよう。その企画書[4]に今回の展覧会は「福沢先生が（中略）日本の近代化に大きな業績を残した足跡を展示し、あわせて先生の薫陶の下に育った門下生たちが、教育、言論、文芸、政治、経済、地方開発など諸方面で、近代日本の形成を担ったその活動を紹介しようとするものであります」とある通り、「福沢および福沢門下生」に関して、全体で五部構成、すなわち第一部「中津と福沢諭吉」、第二部「黒船ショックと西欧体験」、第三部「日本の近代化と福沢諭吉」、第四部「新時代の形成者たち」および第五部「独立自尊の人・福沢諭吉」からなる展覧会であり、そのなかの第四部はさらに第一のコーナーで「文明開化のリーダーたち」、第二のコーナーで「殖産興業の担い手群像―中央と地方」、第三のコーナーで「忘れ得ぬ三田の先人たち」が紹介されていた。

具体的には第一の「文明開化のリーダーたち」では（1）教育―小幡篤次郎、鎌田栄吉、林毅陸、北里柴三郎、堀江帰一、高橋誠一郎、小泉信三、（2）文芸―水上瀧太郎、久保田万太郎、佐藤春夫、岩田豊雄（獅子文六）、西脇順三郎、堀口大学、（3）スポーツ―平沼亮三、（4）言論―犬養毅、尾崎行雄、矢野文雄、馬場辰猪、石河幹明、本山彦一、竹越与三郎、板倉卓蔵と四項目が立てられ、第二の「殖産興業の担い手群像」では（1）実業―荘田平五郎、中上川彦次郎、阿部泰蔵、門野幾之進、中村道太、朝吹英二、池田成彬、日比翁助、小林一三、藤山雷太、松永安左ェ門、武藤山治、藤原銀次郎、早矢仕有的、森村市左衛門、（2）地方開発―依田勉三、川田龍吉、井坂直幹、菊池九郎、神津グループ（国助、邦太郎、藤平）、伊藤作左衛門、牛場卓蔵、高取伊好、元吉秀三郎、高嶺朝教と「中央と地方」の二項目が立てられ、そして第三の「忘れ得ぬ三田の先人たち」は小幡英之助、高山紀斎、血脇守之助、井上十吉、石川暎作、釋宗演、田中館愛橘、兪吉濬という計五七名の顔触れであった。(5)

それぞれの人物には肖像写真と一定量のキャプションが添えられ、その上に例えば地方開発（十勝の開拓事業）の依田勉三の場合には、八点の借用品と福沢研究センター所蔵の勉三ブロンズ像一点の計九点が展示された。借用品については当時の借用証で見てみよう。借用者は慶應義塾・「福沢諭吉展」委員会委員長の常任理事佐野勝男、借用書の宛先は帯広百年記念館で、本文にはこう記されていた。すなわち、

つぎの品目を生誕百五十年記念「福沢諭吉展」（昭和五十九年十月九日～二十一日、東京日本橋三越本店）に出陳のため左記の通り拝借いたします。

記

一、品目

入門姓名庚数録[6]　壱　　印鑑類　　壱揃
依田勉三写真ネガ　壱　　拓本「ますらおが…」[ママ]　壱
十勝興農意見書　壱　　晩成者規則[ママ]　壱
マルセイバターラベル　壱　　北海紀行　壱
計八点

借用証を持主側に手渡す前には、言うまでもなくまず「出品のお願い」との書類を塾長石川忠雄と担当理事佐野勝男の連名で提出し、それに対して持主側からは「出品承諾書」を慶應義塾「福沢諭吉展」委員会宛にて出して頂いていた。より詳しく言えば、まず東京の日本橋三越本店での展覧会への出品の依頼であったので、次の大阪三越店、横浜三越店での展覧会に当たっては「継続」の書類が交わされていた。また「大阪展の規模は会場面積については日本橋展の約50％、資料数は展覧延面積から日本橋展の80％を出陳」[7]であった。現地に「福沢諭吉展」委員会側の人間がそれぞれ出向いて現物を拝借し、そして展覧会終了後には現物の返還と同時に、持主側に保管されていた借用証をこちらに返還してもらう手続きが「福沢諭吉展」委員会以外の方々のお手をも煩わせて行なわれた。「出陳のため借用した高取伊好書額一点についても補修の必要があるため、本センターで費用を負担」[8]して、その後に返却するということも起こっていた。東京日本橋三越本店での「会期中には約三万名の入場者があり」[9]、また大阪三越店での入場者数は約八三〇〇名であった。[10]

当時の展示品で、筆者自身が関係した第四部「新時代の形成者たち」の場合に、筆者の手元に残るリストか

ら、各項目別に慶應義塾（福沢研究センター、図書館貴重室、広報課など）所蔵か個人蔵（他大学、記念館などの所蔵を含む）かを分けてその数量と割合を一覧表にしてみる。

第四部「新時代の形成者たち」

	物品項目数	義塾蔵（割合）	個人蔵（割合）
「文明開化のリーダーたち」（1）教育―	八六	三一（36％）	五五（64％）
「文明開化のリーダーたち」（2）文藝―	六七	五二（78％）	一五（22％）
「文明開化のリーダーたち」（3）スポーツ―	九	四（44％）	五（56％）
「文明開化のリーダーたち」（4）言論―	四六	三四（74％）	一二（26％）
「殖産興業の担い手群像」（1）実業―	一一七	七一（61％）	四六（39％）
「殖産興業の担い手群像」（2）地方開発―	八六	三九（45％）	四七（55％）
「忘れ得ぬ三田の先人たち」―	三九	二二（56％）	一七（44％）
合計	四五〇	二五三（56％）	一九七（44％）

塾内で調達出来る展示品の割合が低かったのは、平沼亮三一名の場合である「文明開化のリーダーたち」（3）スポーツ―を除き、右の一覧表からもわかるように、「文明開化のリーダーたち」（1）教育―と「殖産興業の担い手群像」（2）地方開発―の二分野であった。具体的に借用先を見てみると、前者の「教育」の場合には首都圏在住者からの借用であり、首都圏以外に出向いての借用のケースは皆無だった。これに対して後者の「地方開発」の場合には、借用先は依田勉三が帯広市緑ケ丘の帯広市百年記念館であり、川田龍吉が北海

道上磯町当別の男爵資料館であり、井坂直幹が能代市柳町の井坂記念館であった。とは言え、生誕一五〇年記念福沢諭吉展開催のために必要だった労力はこうした記念館への出張調査が主だったわけではなかった。

生誕一五〇年記念福沢諭吉展の図録の第四部「新時代の形成者たち」の個所は福沢研究センターの丸山信君が執筆したもので、入社帳（文久三年春～明治三四年）に記載された生国、府藩県、府県の欄を集計し、「入学者出身地別分布図」（文久三年春～明治三四年）[11]を載せている。その期間に入学者数が最も多かった鹿児島県を始めとして、数の多いことが判明した大分、福岡、熊本、和歌山、静岡、また福井、石川、高知、徳島、岡山、広島、島根、青森などに、共同研究のメンバーが入社帳のコピーや集計表を携えて「福沢門下生」の足跡をその出身地で辿る出張調査が行なわれた。なお、丸山君は同じ図録のなかで明治期の「義塾という名の学校」[12]が全国で三三六校あり、それらを道府県別に記した日本地図を載せているが、本稿冒頭に引用した座談会で石坂所長はこうも発言していた。すなわち、

> 教育界と並んで言論界もかなりの数であることは間違いなくて、特に初期の人たちは大体論説主幹という形で多いようです。そして福沢流の文明の哲学、論陣を張っています。こういう点からいくと、先ほど話の出たように社会の各方面で新しい生活領域を切り開いていった方たちがたくさんいるわけです。（中略）この際振り返ってみて、いかに福沢先生なり門下生がそういう面で活躍していたかということを展覧会に何か表現できればいいがと思います。[13]

次にこうした「社会の各方面で新しい生活領域を切り開」く「福沢および福沢門下生」に関して一九八四年

一〇月から開催された生誕一五〇年記念福沢諭吉展開催につながった、一九七九年四月から計六ヶ年に亘る慶應義塾学事振興資金、福沢諭吉記念慶應義塾学事振興資金による研究補助を受けた共同研究について記そう。

三、共同研究

一九七九年度（昭和五四年度）からの第一次共同研究と一九八二年度（昭和五七年度）からの第二次共同研究を比較すると、まず共通点は入塾者の多い地方への出張調査による資料発掘と資料解読による明治期の「福沢および福沢門下生の活躍」（第一次）、「福沢および福沢門下生の活動」（第二次）の軌跡を辿り、「従来、ほとんど知られていなかった、塾員の地方での活動の領域における事項を発掘し、それに照明を当てる」（昭和五七年度福沢諭吉記念慶應義塾学事振興資金による研究補助申請書「研究目的及び研究計画・方法」）ことであり、そして相違点は現地調査の範囲拡大、予算規模の拡大であり、「塾史編纂上の充実が可能になると共に、他方では、日本近代史、とくにその地方史研究に資する」（同）意図の明示であったと言えよう。

実は第一次共同研究では補助申請額と補助額のうち、今日では申請額は不明で補助額だけしか分からないが、その補助額が一九七九年度（昭和五四年度）が一三〇万円、一九八〇年度（昭和五五年度）が一五〇万円、そして一九八一年度（昭和五六年度）が一五〇万円であった。これに対して第二次共同研究では補助申請額と補助額の両方がすべてではないが判明しており、一九八二年度（昭和五七年度）は補助申請額が四〇五万円、補助額が三〇五万円、一九八三年度（昭和五八年度）は補助申請額が二八〇万円、補助額が二二八万円、そして一九八四年度（昭和五九年度）は補助申請額が不明で、補助額が三二六万円であった。第一次共同研究への補

助額合計は四三〇万円、第二次共同研究への補助額合計が八五九万円であり、ほぼ二倍に増えていた。[14]

第二次共同研究の研究代表者は前述の通り高鳥正夫法学部教授、そして研究分担者の欄には内山秀夫法学部教授、河北展生文学部教授、坂井達朗文学部助教授、飯田鼎経済学部教授、石坂巌商学部教授、藤沢益夫商学部教授、西川俊作商学部教授、小野修三商学部助教授、中井芳雄塾史資料室長、丸山信塾史資料室長付、佐志伝日吉高等学校教諭、高木不二日吉高等学校教諭、松崎欣一志木高等学校教諭、医学部助手藤田弘夫の名が並び、研究費は一括使用であった。

第二次共同研究の第二年度（昭和五八年度）研究補助申請書の、初年度に関する「研究経過・成果または準備状況」の欄にはこう記されている。すなわち、「三ヶ年計画の第一年次における、東京での予備調査で判明したことに、熊本大学・花立三郎氏の『大江義塾』（昭和五七年刊）が記述するよりもはるかに多数の慶應義塾関係者が大江義塾にいることがあった。これは入社帳の分析から判明した事柄であったが、塾内の資料を公表するだけでも従来の定説が覆る一例であろう」。（全五巻の『慶應義塾入社帳』限定五〇〇部が公刊されたのは、昭和六一年であった。）その初年度の現地調査は以下の通りであった。すなわち、

一九八二年（昭和五七年）

七月　一日～三日　山形　内山

一〇日　佐賀　石坂

一〇日　久留米　丸山

一一日～一四日　鹿児島　石坂・丸山

二七日～三一日　熊本　坂井・小野
八月　一日～四日　福岡　高鳥・内山・小野
一日～九日　アメリカ・マサチューセッツ　西川
一〇月一六日～一八日　米沢　丸山
一二月二一日～二三日　佐賀・大村　石坂
二一日～二四日　金沢・福井　河北・佐志・高木
一九八三年（昭和五八年）
三月二九日～三一日　静岡　内山・小野

このなかの一九八二年（昭和五七年）七月に石坂・丸山によって行なわれた鹿児島調査に関しては、その報告書が手元にないが、丸山が「福沢先生と鹿児島」と題した論考のなかで、この調査で判明した事柄として「鹿児島新聞（現南日本新聞）草創期は、社長市来七之助（のち野村政明と改める）、記者元吉秀三郎（明治十四年二月七日入学）、矢野可宗（明治十二年九月二十二日入学）など（が）福沢先生の推薦で派遣され」、その「創刊号は、明治十五年二月十日金曜日創刊され、社説には『自由主義』という論題で書かれている。また、創立趣意書は、市来政明らが明治十四年起草しているが、その文面は、『文明論之概略』から真似たとみられ云々」[15]と記している。

同じく一九八二年七月に坂井・小野によって行なわれた熊本調査については、出張調査報告メモが手元に残っており、その「調査概要」の一節を紹介すると、「七月二八日　午前　熊本大学図書館にて永青文庫所蔵の遊

学一巻帳、学校帳を写真撮影する。午後　熊本大学文学部助教授花立三郎氏、済々黌高等学校教諭水野公寿氏に花立氏の研究室にて面会し、ご教授を得る。水野氏からはこれまでも資料をいただいており、今後ともさらに調査へのご協力を依頼する」とある。

なおこの出張調査に先立って水野公寿氏から頂戴していた書簡を紹介しておきたい。昭和五七年三月一八日付の筆者宛ての書簡である。本文中の「拙稿のコピー」とは『近代熊本』第一〇号（一九六九年一一月）所収の水野公寿「林正明について」のコピーであり、この他に水野公寿「九州における民党の形成過程」（『熊本史学』第四七号）、水野公寿「明治憲法体制成立期の反民党勢力」（『日本史研究』二一一号、一九八〇年三月）の抜刷を各一部頂戴した。すなわち、

拝復、春らしさが一日一日と増してくるこのごろです。お便りをいただいて、学年末の多忙に返事が遅れてしまいました。「入社帳」、コピー等の史料有難うございました。熊本からこんなに多数の者が慶応義塾に入っていることは知りませんでした。宮川又三、魚住賀衛は実学党の系譜だと思います。徳永規矩、三村和兵衛、元山總作も実学党系（横井小楠の学党）です。保証人の欄にでてくる江口高邦は徳富蘇峰のおじではなかったと思います。／林正明については、拙稿のコピーを同封いたします。林正明については、なかなか史料がありません。生年月日も出身町村も不明の状態です。「入社帳」第一の写真版に林のものがありますが、その他の史料で生年月日等わかるものはありませんでしょうか。／熊本出身ではありませんが、村上定という人（出身は広島県竹原）は慶応出身（明治一三年卒？）で新聞記者で、明治一三―一五年「熊本新聞」の編集に当っており、相親社という結社の中心人物です。熊本の民権運動におおきな影

響を与えております。／「福沢先生および門下生」の共同研究は、熊本の近代史研究にとって、いろいろ教えられることが多いことと思います。熊本の出身者については今後気をつけて行きたいと思います。今後ともよろしくお願い致します。敬具／三月十八日（なお、斜線は行替えを意味する。以下同じ。――筆者注）

同じ出張調査報告メモの「成果」と題した個所には、熊本大学図書館にて撮影した永青文庫所蔵の遊学一巻帳、学校帳に「宮川又三、岡田攝蔵など慶応入学者がかなりの頻度で名を出していることが判明した」と記されている。そして坂井は一九八四年度『近代日本研究』第一巻で「肥後実学党と初期の慶應義塾（一）―林正明と岡田攝蔵を中心にして―」を公にしている。

次に福岡調査に関して、出張調査報告メモの「調査概要」の一節を同様に紹介すると、「八月二日　午前『玄洋社発掘』の著者で、須恵町役場にて町誌編纂にあたっておられる石瀧豊美氏に面会し、入社帳のリストにそって、ご教授をいただく。石瀧氏からは、これまでもご協力をいただいており、今後ともさらに調査へのご協力を依頼する。／午後　二手に分かれ、内山は九州大学経済学部秀村選三教授と東定宣昌助教授に面会し、入社帳のコピーをお渡しし、調査へのご協力を依頼する。秀村氏からは氏の編になる『近世福岡・博多史料第一集』をいただく。他方、高鳥・小野は福岡三田会を訪れ、入社帳のリストにそって塾員井上廉氏よりお話を伺う」。そしてこの出張調査報告メモの「成果」と題した個所には次のように記されている。すなわち、

石瀧豊美氏からは、これまでも牟田口重蔵などの具体的な活躍の資料をいただいていたが、今回さらに新

しく作成した入社帳のリストから細川藩、柳川藩の家老職の家柄、玄洋社関係の人々の名を挙げていただいた。／秀村選三氏編の『近世福岡・博多史料第一集』には明治一一年入社の高橋達「老いの回想録」が収録されている。／吉田廉氏からは平岡良助、安川清三郎、麻生八郎、林田岩太郎、西原雄太郎、倉成久米吉などといった人々の情報を得た。また同氏は野村祐義についてとくに調べておられる。／県立文化会館に収録されている『七里和上言行録』の七里和上は、万行寺住職で、福沢先生と福岡にて面会していることが同書からわかり、かつ和上の子息順之が明治二二年に入社していることもわかった。また安廣伴一郎はのちに満鉄社長になっていること、久世久の養子に三井信託の久世重三郎がいること、玉江東五郎の子孫が地方史家の玉江彦太郎氏であることなどが、同館の資料によってわかった。

さらに河北・佐志・高木によって行われた金沢・福井調査に関しては、研究代表者に提出された報告書に「調査内容」として次のように記されている。すなわち、

調査内容　a．金沢市立図書館　石川県出身塾員名簿をもとに『北国人物志』、『稿本金沢市史』学事編第二、『加越能時報』、『加越能文庫』等を調査。／塾員・派遣教師石阪専之助君の履歴を明らかにすることができた。（金沢中学校中学部教師）／義塾と命名された学校の存在と概要をいくつか明らかにしえた。中越義塾、明治義塾、英学義塾、漢洋義塾、共立義塾、但し慶應との関係は見出しえなかった。／その他石川県の洋學興隆の系譜を確かめえた。／b．石川県立図書館　館作成の県下人名索引カードをあたり、塾出身の地元人物の軌跡を追う。青池一郎（作見村立片山津尋常小学校々長）、渥美契芳（能美郡小松町

本覚寺住職）、杉村虎一（ドイツ・オーストリー公使）、梅原可也（立憲真正党員）、加藤誠六（名古屋商業学校英語教師）以上の履歴を明らかにしえた。／金沢慶應義塾の所在地を明らかにしえた。別紙地図添付。／c．福井県立図書館　館所蔵松平文庫「士族」、「子弟輩」により県出身者の履歴調査を行う。青山元助、飯田慎之助、伊藤五郎、伊藤勉之助、宇都宮貫一、岡部兵弥、小栗誓らの親族関係の一端を明らかにしえた。／福井銀行の事実上の創設者・塾員市橋保治郎の軌跡を『福井銀行六十年史』、『同八十年史』によって明らかにしえた。／以上文献、文書コピーをとると共に、金沢市立図書館、石川県立図書館、福井県立図書館、福井郷土歴史博物館に慶應義塾入社帳索引を渡し、今後の調査への協力を依頼した。

最後に内山・小野によって行われた静岡調査に関しても、研究代表者に提出された報告書に「調査内容」として次のように記されている。すなわち、

（一九八三年）三月二九日正午過ぎに静岡駅に到着し、出迎えていただいた静岡雙葉学園教諭で文学部出身の塾員宇都宮保宏氏の案内で、まず静岡県立中央図書館に向う。同館にて静岡県紳士録、静岡銀行史、静岡商工会議所八十五年史、浜松商工会議所六十年史、金原明善資料上などに多数の入塾生の氏名を見出し、コピーをとる。次に静岡県議会事務局に赴き、静岡県議会百年史を購入する。／翌三〇日には午前一〇時静岡大学教授和田守氏の御案内で、静岡近代史研究会の市原正恵氏に面会し、市原氏の母方の曾祖父黒川正氏（明治一二年一月入社）に関する資料数点をいただく。また市原氏からは黒川正が静岡民友新聞に大正二年七月二二日から二ヵ月余、回顧録を金城隠士のペンネームで執筆していることを伺い、同日午

後静岡大学図書館所蔵のマイクロフィルムからコピーをとる。同館の春山俊介氏からは、入社帳の中の人名につき、これまで調査いただいたものを教えていただき、また維新期に静岡へ移住した人々の名簿を見せていただき、コピーした。／最終日の三〇日は午前中市内の古書店をまわり、午後宇都宮氏の案内で、静岡の三名家（尾崎、野崎、宮崎）の一つの宮崎家を訪問する。宮崎齢次（明治三〇年入社）、宮崎逸郎（明治三一年入社）兄弟の子孫が現在の宮崎家当主総一郎氏で、氏は経済学部出身の塾員であるが、不在で、ご母堂らと面会した。その際に、福沢先生が静岡に明治一九年三月に来られた際に宮崎家に立ち寄ったこと、齢次、逸郎兄弟の祖父総五が福沢先生からの影響で、朝陽義塾を起こしたことが当時の資料に残っていることなどを伺う。宮崎家を辞してから、次に静岡三田会を訪れ、調査への協力を事務局の三上益弘氏（谷島屋書店社長）らにお願いする。(16)

そして同報告書の「成果」の欄には次のように記されている。すなわち、

今回の成果としては、初動調査としては手懸かりを割合多く得られたと思われる。入社生の地元静岡での活躍の舞台は政界、産業界、銀行界、教育界にあったようで、加藤定吉（衆議院議員）、松島兼作（非政友の副首領、明治六年入社、入社帳には不明）、伊東要蔵（代議士、県会議長、塾教員、明治一四年卒、入社帳は不明）、甲賀英逸（県会議員）、石井研二（非政友の知将、県参事会員）、木内七三郎（県会議員）、松本義一郎（掛川銀行頭取）、菊地幸吉（日本製茶機械株式会社常務取締、入社帳は不明）、黒田敬（父が下河津村長、静岡農工銀行監査役）、岡田金次（江尻商界の人材）、甲賀菊太郎（静岡実業界の人材）―以

上は静岡県紳士録。また小野田曄平（父が浜松貯蓄銀行の創設者。この銀行は昭和一八年に静岡銀行に吸収される）―以上は静岡銀行史。気賀賀子治（父が半十郎で、銀行役員で、浜松商業会議所の設立発起人）、気賀喜代治（兄が半十郎）、気賀健三郎（兄が鷹四郎で、畳表商で、浜松商業会議所設立発起人）、気賀定吉（父が半十郎）、鶴見市太郎（父が信平で、銀行役員で、浜松商工会議所設立発起人）―以上は浜松商工会議所六十年史。また金原明徳（父が明善）―以上は金原明善資料上。また大石喜一（父が清五郎で、静岡商業会議所の設立発起人）―以上は静岡商工会議所八十五年史。／市原正恵氏の曾祖父に当たる黒川正については、飯田宏『静岡県英学史』に伝記が掲載されており、静岡の地のみならず各地で中等英語教育に従事し、静岡民友新聞への回顧録のなかでは、福沢先生の明治一九年の西下の際の塾員による歓迎ぶりなども紹介している。／また春山俊夫氏より朝野新聞明治一五年一二月一七日付に「静岡県会議員中の目論見に慶應義塾の支塾を設けんとの周旋あり」があるとのことである。春山氏からは浅井亮吉、石川浅次郎、石渡敏一、植村金吾、江藤得三、江藤林太郎、大沼吉平、加藤成一、金井賢次、河目宗三郎、木村成太郎、黒田敬、黒水延世、小林栄治郎、小林泉九郎、杉山孫六、鈴木島吉、鈴木安平、鷲見謹吾、高林泰虎、高見沢八五郎、中尾直治、中野真太郎、中野千松、中村浦治郎、橋本孝則の各人につき、本人あるいはその保証人についてのコメントをいただいている。／また宮崎総五に関しては福沢諭吉年譜および石河幹明『福沢諭吉伝』に記載があった。

以上は、前述の通り、第二次共同研究の初年度（昭和五七年度）の調査報告であり、次には第二年次たる一

九八三年度（昭和五八年度）中に実際に行なわれた出張調査について、第三年次の一九八四年度（昭和五九年度）研究補助申請書の「従来の研究経過」の欄を参照して、紹介したいところであるが、手元にその第三年次の研究補助申請書がない。したがって、資料に基いて第二年次たる一九八三年度（昭和五八年度）中に実際に行なわれた出張調査を明らかにすることは出来ないが、ただ第二年次たる一九八三年度（昭和五八年度）研究補助申請書は手元にあるので、そこに記された第二年次の「研究目的及び研究計画・方法」の欄を抜粋しておこう。そのことで第二年次の調査の予定と共に、この共同研究と新設の福沢研究センターとの関係についても、一定の事柄が判明するはずである。一方、この共同研究と生誕一五〇年記念福沢諭吉展との関係については直接的な言及は見られないが、これは当該研究補助申請書の提出時期（一九八三年四月）と福沢諭吉展の決定時期（一九八三年七月）との時間的な前後関係から生じたことだったと思われる。すなわち、

目的―（前略）今までほとんど知られていなかった塾員の出身地である地方での活動を発掘し、発掘の成果を順次整理してゆくことで、新分野を確立する基礎研究たらんとするところにある。調査によって、一方において、塾史編纂上の充実が進むと共に、他方では日本の近代史、とくに地方史研究に資するところ大であることは、第一年次の研究調査を通じて再確認されている。そして、さらに、新設される福沢研究センターに本研究の成果が継承されることも確信するところである。

計画―本研究は塾一二五年の歴史にむけて、第二次三ヵ年計画の第二年次として、第一年次の成果を踏まえ、次のように計画される。／①今年度は第一年次に作成した明治三四年までの県別入社者分布の上位諸

県中、さらに継続調査を必要とする中津、鹿児島、福岡、山形に加え、新たに静岡、佐賀などを加え、調査を拡大する。／②福沢門下生の活動のうち、第一年次の調査研究にてとくに注目に値することが判明した明治初年度の新聞界および教育界における各県での活動を比較分析する。（後略）

方法―方法としては、第一年次の方法が有効であることが判明したので踏襲するが、新設される福沢研究センターとの協力態勢をとる。（中略）④入社帳による塾員の個表作成（カード化）作業を行なう。このカードは新設の福沢研究センターに継承、保管され、活用されることを期待する。

繰り返しになるが、手元には第三年次の一九八四年度（昭和五九年度）研究補助申請書がない。ただ、筆者の手元にある当時の手帳には、一九八三年度（昭和五八年度）中に筆者自身が行なった出張記録が記されており、一一月一八日に高知市、一九日に安芸市、二一日に徳島市で調査を行なっている。したがって、一九八三年度（昭和五八年度）研究補助申請書には「新たに」実施されることになる高知・徳島調査を「調査を拡大する」予定の中に含めていない点、また前年度中に既に行なわれた静岡・佐賀調査を「新たに」実施される調査対象に加えるという点でそれぞれ誤った記述があり、筆者は同年度研究補助申請書作成に係わった者の一人として慙愧に堪えない。また筆者においては、この年の七月に決定した福沢諭吉展の展示対象の絞り込み作業[17]には参加しておらず、そのプロセスを踏まえた議論はなし得ないが、しかし二次に亘る共同研究の成果が、生誕一五〇年記念福沢諭吉展企画書のなかの言葉を再び引けば、当の福沢諭吉展が「先生の薫陶の下に育った門下生たちが、教育、言論、文芸、政治、経済、地方開発など諸方面で、近代日本の形成を担ったその活動を紹介

しようとするものであ」る点において、十分にそのなかに反映されていたことは否定し得ないだろう。最後に、初代福沢研究センターの石坂所長のもとで副所長を務め、後に所長に就任した内山秀夫法学部教授が一九八五年三月号の『三田評論』に寄せた論考「私の場合としての福沢諭吉」を紹介したい。

四、おわりに

個人史と時代史との交点で語られている「私の場合としての福沢諭吉」は、同じく個人史と時代史との交点で語ろうとする者らにとっては、その特定の「個人史」の内容それ自体は共有し得なくとも、意味ある論考として迫るものを持ち続けており、本稿との関連で重要な証言も読むことが出来るので、紹介したいと思う。すなわち、

今では退職された文学部の中井信彦先生、経済学部の島崎隆夫先生をはじめ、河北さん、石坂さん、高鳥（正夫）さんといった方がたのこのグループは、私には、ひとあじ違った慶應主義者のそれであった。お名前をあげたことでご迷惑であるかもしれない非礼を私は意識している。しかし、この方がたの「慶應主義」は、あるいは、「諭吉は今日の慶應大学の前身である私塾を開き、それはかつては教育における急進的改革の象徴であったが、のちには工業国日本の最も保守的な教育機関になった」（加藤周一ほか『日本人の死生観』）と指摘されている事実にたいして、義塾を放っておけばますます制度的安逸におちいるかもしれない、という危機感を秘めた形のものであるように私には思えた。「人はいるのだ」。そこには、た

つみあがりの言挙げはなかった。一人ひとりが厳しくも熱い慶應主義者である。（中略）こういった方がたとの「交際」は、私を慶應主義者にすることにふみきらした。その場合、私に遮断しておかねばならぬ〝心事〟は、福沢原理主義者では全然ないところに据えつけねばならない。[18]

そしてこうした「交際」の一つが次のそれであった。すなわち、

福沢との私の結縁をより緊密にする事態がふってわいた。「ふってわく」というと語弊がある。それは文学部の河北展生教授のグループが福沢門下生の、それも中央ではなく、地方での活動をさぐる必要を、塾一〇〇年史編纂の経験から切実に感じておられて、その調査を実施しようとなさっている、という情報が耳に入ったことに発端する。商学部の石坂巌先生からうかがったのではなかったろうか。[19]

具体的な日付けが言及されていないので断定は出来ないが、これは一九七九年度（昭和五四年度）慶應義塾学事振興資金による研究補助申請書「明治期における福沢および福沢門下生の活躍に関する資料蒐集・整理・基礎的研究（一）」（研究代表者島崎隆夫経済学部教授）の作成前夜の「交際」だったのではないだろうか。この「交際」を経て、共同研究が構想されたことが証言されていると言えるのではないか。論考「私の場合としての福沢諭吉」では「人と思想とことがらの切れることのあるはずのない関連」[20]とも語られているが、しかし実際にはこの「人と思想とことがら」の「関連」は簡単に切れるはずである、知的誠実さを大切にする「人」がそこにいなくなれば。知的誠実さが失われる時、「ことがら」と「思想」とが分離し、「ことがら」は殷賑を

極めても、一九八四年八月一日発行の『塾』の「座談会　福沢諭吉展の開催をめぐって」のなかで福沢研究センター所長の石坂巌商学部教授が語った「社会の各方面で新しい生活領域を切り開」くという営みも、『三田評論』一九八五年三月号の「私の場合としての福沢諭吉」のなかで同センター副所長の内山秀夫法学部教授が語った「政治を変えてゆく、社会を変えてゆく、そして歴史を創ってゆく」[21]という営みも、杳として行方知れずとなる運命にある。

筆者自身はこれまでに知的誠実さを捨てた覚えは一度もないとは言い兼ねるが、生きることを自己決定出来ると思われていた時代から、個人の生き方は全体の動きが決める、つまり全体に関する総合的な情報を持つことで、全体の動きがわかり、その全体がわかることで初めて個人の動きを準備することが出来る時代へと移り変わった[22]現代でも、まず個人に係わる教養を求める欲求が知的行為であり、そして個人がその教養を糧に「切り開」き、「創ってゆく」立場に立ちたいと思っている。そうした立場からでなければ、時代史と個人史との交差を描くことも出来ないだろう。なお、本稿は限られた資料によって成っているため、見落としのない観察になっているとは考えられない。御批判を切に願う次第である。

注

（1）「座談会　福沢諭吉展の開催をめぐって」、『塾』通算第一二六号、一九八四年八月一日発行、六ページ。

（2）『生誕一五〇年記念福沢諭吉展―黒船来航から独立自尊まで―』福沢諭吉展委員会編、一九八四年、奥付。

（3）慶應義塾研究支援センター本部保管資料による。

（4）生誕百五十年記念「福沢諭吉展」企画書。

（5）前掲『生誕一五〇年記念福沢諭吉展―黒船来航から独立自尊まで―』参照。この五七名のうち、とくに「地方開発」と「忘れ得ぬ三田の先人たち」の両項目で履歴が紹介されている計二〇名のうち、二〇〇八年の『慶應義塾史事典』Ⅶ「社中の人びと」でも紹介されているのは五名（依田勉三、井坂直幹、牛場卓蔵、田中館愛橘、兪吉濬）だけなので、一九八四年の図録『生誕一五〇年記念福沢諭吉展―黒船来航から独立自尊まで―』は貴重である。

（6）「勉三が七歳で漢学塾・三余塾（松崎町）に入門した時に自分の名前を書いた『入門姓名庚数録』」など帯広百年記念館所蔵の依田勉三資料八点が、東京での福沢諭吉展に貸し出される旨が十勝毎日新聞（一九八四年一〇月六日付）で報じられている。この記事や同年一〇月七日付の北海道新聞などを同記念館学芸調査員の大和田努氏よりこの度御教示頂いた。

（7）福沢研究センター会議記録、昭和五九年一二月一四日（金）報告事項第四。

（8）福沢研究センター会議記録、昭和六〇年一月一八日（金）議題第三。

（9）「塾長室日誌」、『三田評論』第八五三号、一九八四年一二月号、八〇ページ。

（10）福沢研究センター会議記録、昭和六〇年一月一八日（金）報告事項。

（11）前掲『生誕一五〇年記念福沢諭吉展―黒船来航から独立自尊まで―』八一ページ。

（12）同右。

（13）前掲「座談会　福沢諭吉展の開催をめぐって」一〇ページ。

（14）慶應義塾研究支援センター本部保管資料による。

（15）丸山信「福沢先生と鹿児島」、『塾友』塾友社、一九八二年九月号、五〇ページ。

（16）なお、この静岡調査で案内頂いた宇都宮保宏氏は、後日『静岡県近代史研究会会報』（月刊五七号、一九八三年六月一〇日発行）で私たちの調査に触れつつ「明治の静岡県と福沢諭吉」を執筆された。また筆者は同会報（月刊六九号、一九八四年六月一〇日発行）に「地方と中央―一つの試論―」を寄稿し、「地方は地方の人間と中央の人間のせ

めぎ合う場」であり、「地方史と中央史の二つの歴史をともに視野に入れて」研究したい旨を述べた。

（17）福沢研究センター会議記録、昭和五九年三月二七日（火）報告事項第一「福沢諭吉生誕一五〇年展の経過報告」①に「第四部福沢門下生人物リストの選考基準の説明」とあり、また同会議記録、昭和五九年五月一九日（土）「その他の報告」の個所に出張予定として、「・五月末～六月初　北海道、秋田　丸山　福沢諭吉展出品物調査および借用品交渉　・六月二五日～三〇日　中津、鹿児島　石坂、河北、丸山　門下生の調査および福沢諭吉展出品物調査」とある。筆者は同会議記録、昭和五九年一一月九日（金）議題七「大阪『福沢諭吉展』について」配布資料「教職員出張予定表」の「一二月二八日（金）飾付」および「一月一三日（日）撤収」の個所に名を連ねている。

（18）内山秀夫「私の場合としての福沢諭吉」、『三田評論』第八五六号、一九八五年三月号、二四ページ。

（19）同右、二三ページ。

（20）同右、二〇ページ。

（21）同右。

（22）こうした現象を小林敏明はその著『〈主体〉のゆくえ―日本近代思想史への一視角―』（講談社、二〇一〇年）のなかで「主体の希薄化」（二一八ページ）と呼んだ。